

工藤力男先生を送る

こたび工藤先生の定年退職により、わが国文学専攻また国文学科は、その背骨たる存在を失う。学科運営や入試作成において、先生の発言提言は私どものとるべき方向のための屈強の指針となり、外向きには批判を受けた場合に備える理論的支柱であった。学生に対しても教員に対しても、その等しく忌憚のない接し方は生来の潔癖のなせるところであることは勿論、またそれは、さまざまな紆余曲折を経て生きて来られた先生の、意識的に選択された道でもあったかと想像する。イザナギイザナミの産んだ水蛭子が育たなかったように、背骨なきグニャグニャ教育では、人は真に育たない。まずは興味をもたせることが先決です、学生も教員も同じ目線で授業を作りあげていくのデス、などというしたり顔の掛け声のもと、自分だけは嫌われたくないという心理も手伝って、学校で家庭で、そしていまや社会全体で、年長者たちが自ら痛い腰をかがめ、未熟な者たちの低く狭い視野に合わせて労する風潮が蔓延している。日々の辛抱強い基礎学力の鍛錬から目をそらし、世に喧しいFDだのITだのに進んで追従する傾向が、それに掉さしているこというまでもない。そして瞬時にわかりやすくを旨として、そつなくパワーポイントなぞ使って時間をついやし、アカハラだセクハラだと訴訟されぬよう、神経質なまでの低姿勢と媚態を保ちつつ、授業アンケートで悪く書かれなければほっとするような、退嬰的な姿勢が教育界を蔽ってしまった。そのように

口当たり良く喚起された興味など、実は持続しない。お膳立てが過ぎて自力をつけることができなからである。いやそうした、はやりの言葉でいえばスキルの問題だけではなく、自分が今ここでいったいなにをなすべきかという具体的思考を鍛える環境が、過剰なプログラミングによってすっぽりと抜け落ちてしまふからである。そうした真の体力、そしてそこからのみ醸成される強靱な創造性がなければ、学問といわず、人生の長く険しい道において、どこかで挫折することは目に見えている。思えば今どきの教員は、猫なで声を弄してオイデオイデをした末、子供たちの上ってきた梯子をポンとはずすような重大な罪を、知らず犯していることにならないのか。かく世を挙げて慈母を演じたがる風潮の中、先生はあえて毅然とした厳父の任を選ばれた。時に嵐のごとく容赦なく、時に冷酷とも思えるほど突き放し——。平素より直情径行、頭に二文字がつくほどの真面目さが、ヒネリの利きすぎたこのご時勢ではむしろ特異な存在である。教場では静謐礼儀を重んじ、校務においては精励迅速、会議では直言、時間は厳守、また文章は達意簡明。もとより学問においては厳密精確をきわめ、寸分の相違もゆるがせにされないことは周知である。廊下も直角に曲がると噂されるほどスクエアに見える先生の後姿には、苦勞を重ねて来られた方特有の虚無の匂いもないではないが、非礼を顧みずに臆測するならば、それ以上に胸奥には燃え上がるような愛情の坩堝を持たれ、日ごろの端正なご行跡も、そのあふれんばかりの奔流を自ら抑えつけようとなさる余りの表現だとはいえまいか。そしてその内なる激情を抑え込む同じ情熱をつかって、外在の事柄の矛盾を突き、どこ迄も理的に名を正そうとされていたのだと。すなわちわが学科は、あのアポロンにも譬うべき朽尾武名誉教授に続いて、いまや好一对たるディオニソスを失い、全体の均衡と重みを欠くことと

なったのである。残った私どもの手でそれを回復できるかどうかは、甚だ心もとない。ご退職後は、成城赴任前からご自宅のあった岐阜の地で、地元の町会に参画されると伺った。いま僭越にも、荒ぶるディオニソス神になぞらえたのはニーチェ的対比によってだが、戸部順一さんに聞けば、エウリピデスの悲劇バツカイにおいて、このゼウスの息子はニーチェ流のおどろおどろしいイメージとはうってかわり、テーバイの女性たちをして宗教的に狂信させるほどの、優美な金髪の若衆姿に化して登場するという。先生にも白哲の美青年の面影は十分に残っている。どうかさらなるご加餐のうえ、衆を魅了する村夫子として土地の人々から遇せられんことを、またかの地のみならず、改革という突き上げに少々疲れた私どもにも、末永くその若々しい力を吹き込んで下さることを願うばかりである。平成二十一年三月念日宮崎修多記